東京の大学で方言教育を実践する
——記述研究の立場から——

白　岩　広　行

1．はじめに

日本語の諸方言は、若い世代で標準日本語へのシフトが進み、話者の高齢化が進むことで消滅の危機に瀕している。この状況を受け、方言研究者は次世代への方言継承にむけた様々な取り組みを試みている。その多くは首都圏以外の地域で地元のことばを扱ったものだが、筆者は本学（立正大学）の授業科目で首都圏在住の学生に対して福島県北部の方言を教授するという実践をおこなった。本稿ではその授業実践を報告するとともに、実践のために記述研究が重要であることを確認する。

以下、2節で近年の方言教育の先行事例を概観し、3節で筆者の実践のねらいを説明する。4節で具体的な授業計画を示し、5節で受講生の反応を示す。最後の6節で授業の反省点を振り返り、記述研究の重要性について述べる。

2．近年の方言教育活動の事例

日本各地における方言から標準日本語への言語交替は、テレビの普及や生活スタイルの変化とともに、戦後の高度成長期に急速に進んだ。この急激な標準語化の影響を受ける前に言語形成期を送った世代は高齢化が進み、近年、方言の消滅が現実化しつつある。そのなかで、単に研究対象として方言を扱うだけでなく、方言を次世代に伝えようとする機運が研究者間で高まっている。

そのような継承への取り組みは以前からあったが、特にひとつの契機となったのは2011年の東日本大震災である。未曽有の災害で地域社会そのものが危機に直面するなか、多くの研究者が自らの研究活動の社会的意義を問い直した。また、政府による復興の基本方針に地域文化の振興策として方言の再興が挙げられ、文化庁を中心に被災地方言の活性化支援が始まった。東北地方などで活動する様々な研究者がこの事業に参加し、方言の記録保存と継承に向けた取り組みをおこなった。一連の成果は東北大学方言研究センター（2012）や大野・小林編（2015）などにまとめられている。

ここから発展する形で2017年には関連の研究者による「実践方言研究会」が作られた。これは年２回の定期的な研究発表をおこなう会で、方言の継承にむけた実践事例が多く報告されている。

また、こうした機運の全国的な高まりを受け、2017年５月に開催された日本方言研究会の第104回研究発表会では「方言に関する教育活動」と題したブース発表のセッションが設けられ、多数の実践事例が報告されている。

このように、方言を次世代に伝える活動の実践は、近年の日本の方言研究の世界でひとつの潮流をなしている。そのなかで具体的にどのような実践がなされているかを以下の表に示す。表１は実践方言研究会における各回の発表一覧、表２は第104回日本方言研究会の「方言に関する教育活動」のブースセッションの発表一覧である[1]。

発表題目だけでは具体的な内容のわからないものもあるが、地域の小中学校や高校での授業実践が多く見られる。次世代への継承ということで真っ

表1　実践方言研究会における各回の発表一覧

第1回 2017.11.11	「方言調査を介した被災地支援　―避難指示解除地域における取り組み―」半沢康・本多真史 「災害時を想定した実践方言研究の試み」村上敬一
第2回 2018.5.19	「岩手県沿岸被災地の小・中学校における方言理解教育の支援」大野眞男・竹田晃子・小島聡子 「「しまくとぅば」普及推進計画と学校の取組」中本謙
第3回 2018.10.13	「高齢者と方言の関係　―宮城県名取市「方言を語り残そう会」の取り組みから考える―」櫛引祐希子 「マスメディア・生涯教育を中心とした地域への方言の発信」加藤和夫
第4回 2019.5.18	「小学校における方言学習の改善に向けて　―教科書教材での学習から生きたことばで学ぶ学習への転換―」今村かほる・庭田瑞穂 「方言授業実践から見えてきたこと　―岐阜大学附属中学校での授業実践を通して―」山田敏弘
第5回 2019.10.26	「東京の大学で方言教育を実践する　―記述研究の立場から―」白岩広行 「「ぐんま方言かるた」を用いた教育実践」佐藤高司
第6回 2020.10.31	「八丈町における方言継承の取り組み」三樹陽介 「方言継承と昔話　―茨城における昔話の会を中心に―」杉本妙子

※第5回の1件目の発表は、本稿のもととなった筆者による発表である。左欄の数字は開催年月日を示す。2020年春の研究会は新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため開催されなかった。

表2　第104回日本方言研究会のブースセッション「方言に関する教育活動」の発表一覧

「高等学校生徒による方言教材作成　―〈篠山弁〉を事例として―」藤本真理子・西本智子
「琉球諸語の音声教材作成と展望」當山奈那
「大学での方言教育において授業者及び受講者の制作した方言教材　―授業名「群馬の言葉とこども」―」佐藤高司
「東日本大震災被災地における方言教育の取り組み」小林初夫・半沢康
「しまくとぅば教材の作成と実践」中本謙・山口栄臣・仲原穣・西岡敏
「「おらほ弁で語っぺし」プロジェクトの報告」大野眞男・小島聡子・竹田晃子
「高校生による奄美大島方言調査実践　―鹿児島県立大島北高等学校「聞き書きサークル」活動の一環として―」重野裕美・白田理人
「言語復興の港：コミュニティ参加型の地域言語学習コンテンツ制作・利用プロジェクト」山田真寛・下地賀代子・中川奈津子・山本史・横山（徳永）晶子・浅川友里江
「一般市民を対象としたマスメディアや生涯教育を通じた方言教育　―石川県・福井県における実践事例から―」加藤和夫
「25年間に及ぶ高等学校での方言教育の軌跡」札埜和男
「地域方言を題材とした高大連携による教育活動の実践　―徳島県立池田高校探究科と徳島大学総合科学部の取組から―」村上敬一・田島幹大・吉平綾加

先に想起されるのは言語形成期にある子どもへの教育だから、学校との連携を考えるのは自然なことだ。これらの実践は、その学校のある地域の方言を題材にしたもので、児童生徒が身近な方言語彙をグループワークで集めたり、高齢者の方言による語りを聞いたり、自分たちで方言劇を演じてみたりといった活動が含まれる。研究者が自らの知見を生かし、学校現場の教師とともに教材作成や授業設計に関わるという形が一般的である。上の表に挙げたのは研究発表の事例だが、佐藤（2019）は論文の形で報告された実践事例を20例挙げて比較しながら分析している。

これら学校での方言教育は、国語の授業内で単発の単元としておこなわれている。例えば英語が

ひとつの教科として扱われるのとは違い、方言が継続的に学習対象になるわけではないから、これだけで児童生徒が方言の運用能力を身につけることはないだろう。しかし、このような活動が方言の存在を意識するきっかけになれば、日常での方言使用につながるという効果が期待できる。

一方、直接子どもにむけた学校教育でなく、家庭や地域社会の親世代の人たちとの連携に重点を置いた活動もある。伝統的な方言の話し手といえば高齢者だと思われがちが、横山・籠宮（2019）は琉球沖永良部島[2)]での言語実験から30代後半くらいの若い世代でも伝統方言の理解力は高齢者とほぼ変わらないことを示し、30代後半～50代の世代を「潜在話者」と位置づけている。この世代の潜在話者は、話す機会がないだけで、伝統方言の基本的な文法事項や語彙は習得していると考えられる。これに続く横山・冨岡（2019）の聞き取り調査によると、この世代はおおむね家庭内で親や祖父母が方言を話すのを聞いて育った世代であり、家庭内の言語環境が方言の習得につながった可能性がある。

ここから示唆されるのは、方言の習得にあたって家庭内の言語環境が大きな要因であること、そして、現在30代後半～50代の子育て世代は潜在的な方言話者だということである。潜在話者である親が家庭内で方言を使う機会を作れば、子どもへの継承も現実味を増す。そのような考えから、沖永良部島をはじめとした琉球のいくつかの地域では、方言による絵本やweb動画を作ることで、親世代が方言を使用しながら子育てする機会を増やす取り組みが進んでいる。地域が受け継いできたことばを自分も実際に話し、子どもたちに伝えたいと願う潜在話者は確実にいる。そのような願いを実現するための仕組みや道具立てを、子育ての主体である親世代とともに作り上げるというのが活動の趣旨である。それらの取り組みについては山田（2017）、中川・山田（2018）、横山（2019）などの論文、報告書にまとめられており、一般向けにはwebサイト「言語復興の港」（https://plr-minato. wixsite.com/webminato）で随時情報が発信されている。

3．東京の大学で実践する意義

前節で見たように、方言の継承を目指した活動は全国各地でおこなわれている。しかし、筆者の知る限り、東京を中心とした首都圏での事例は聞かれない（首都圏は、法的には北関東や山梨県を含む広い地域を指すが、本稿では通勤通学などの日常的な人の流動で都心部とつながりの大きい東京近郊の地域を指すことにする)。

首都圏のことばは、研究上は首都圏方言と呼ばれるが、一般に方言と見なされることは少ない。また、世代によって変化してはいるものの、言語として消滅の危機に瀕しているわけではない。首都圏方言は日本語の標準変種であり、他地域の方言を危機に追いやっている側なのだから、これは当然である。だから、方言の継承という観点から首都圏で首都圏方言の教育実践をする必要はない。しかし、首都圏で他地域の方言の教育実践をすることには意義があるのではないだろうか。

大きな視点で言い換えれば、消滅の危機にある少数言語や方言の問題は、言語的マイノリティの問題である。言語に限らず、マイノリティの問題はマイノリティ自身の努力に加え、マジョリティの理解もあったほうがよい方向に向かいやすいだろう。全国各地の方言の継承も、マジョリティである首都圏方言話者の理解があったほうがよい。現代社会において、全国的な世の中の動きと無関係に、特定の地域でだけ方言が受け継がれ続けるということは考えにくい。継承の意義が首都圏の人たちにも共有され、方言の多様性を尊重する価値観が全国に浸透したほうが、次世代への継承も実現しやすいだろう。

そこで筆者は、自らの母方言であり研究対象でもある福島県北部方言の授業実践を、本学の授業科目としておこなった。本学は東京都心にある私立大学であり、学生も首都圏出身者が多数を占める[3)]。彼らにとって未知の方言の授業実践をおこなった場合、どのような反応が得られるかを試したいと考えた。ほとんどの学生にとって福島県北部方言はなじみのないことばだが、英語や第二外国語の学習のように、方言学習にも興味を持つ人が首都圏に増えれば、それは全国各地の方言継承活動を後押しするだろう。例えば、「東京の学生も楽しく福島の方言を勉強している」ということが福島に伝われば、それは福島の人たちの意識を変えるかもしれない。

筆者にとって本学は授業実践がおこないやすい場でもある。地域で継承活動を進めるには、そのフィールドに何度も足を運んで多くの人と連携しなければならないが、遠隔地の大学にいる研究者にとって、それは大きな労力を要する。まず日常的な仕事の一環として自分の授業のなかで方言教育を試行するのが良策ではないか。身近なことからはじめれば無理なく続けやすい。そのうえで、そこから得た経験や教材をより地域に近い研究者や実践者と共有できれば、効果的に継承活動を進められる。

加えていえば、方言の継承というだけでなく、記述研究の立場からの問題意識もある。近年の方言記述研究では、特定の文法現象だけを個別に扱うのではなく、言語としての体系全体を扱うことが求められている。それにあわせて、大学の授業でも、ひとつの方言の体系全体を扱ってみたいと考えた。筆者の場合、方言を主題にした授業では、これまで、自発表現なら北海道方言のサル、アスペクト表現なら中国・四国・九州方言のヨル・トル、敬語表現なら近畿方言のハル敬語など、各地の方言の特徴的な文法現象を個別に講じてきた。もちろん、それは、それぞれの文法現象を理解するために有効なことである。しかし、個別言語の体系を理解することにはならない。ことばは体系として存在するものだから、特定の文法現象だけ切り取って扱うのでなく、ある方言の体系全体を基本から講ずる授業があってよいと考えた。

以上のことから、本学の授業科目として方言教育をおこなうことには意義があると考え、筆者は2018年度後期の文学部文学科日本語日本文学専攻コースの専門科目「現代言語科学２」（選択必修科目）で実践を試みた。

4．授業実践のための言語計画

筆者のおこなった授業の概要として資料１にシラバスの抜粋を示す。

実践の場で明確に意識されることは少ないが、方言教育はことばのありかたに人為的な手を加えることであるから、一種の「言語計画」が必要だと考えた。言語計画とはことばのありかたを方向づける計画であり、どのことばを選定するかの「席次計画」、そのことばの実質を整備する「実体計画」、整備したことばをどのように教え広めるかの「普及計画」の３つからなる。筆者の実践は小さな活動ではあるが、授業を構想するにあたってそれぞれ次のような計画を立てた。

4．1　席次計画

まず、席次計画として、教える対象の方言を選定した。授業で主として扱ったのは福島市を中心とした福島県北部の方言（以下、「福島方言」と呼ぶ）である。筆者は1982年に福島県北部の旧保原町（現伊達市）で生まれ、18歳まで福島県内で成育した。家族の両親、祖父母、曾祖母は家庭内で福島方言を使っており、自身が30代後半の潜在話者にあたると考えている。潜在話者としてこの方言の基本的な運用能力を持つこと、また、自らの母方言を教えたいと思ったことから、福島方言を

資料１　2018年度後期「現代言語科学２」シラバス抜粋

■授業の目的

国内の少数言語・方言を継承する意義について考えたうえで、外国語を学習するときと同じような形で、国内の２つの方言の学習をおこなう。１つは授業者の母方言である日本語福島方言、もう１つは琉球語沖縄中南部方言（以下、「沖縄方言」）である。学習を通じて、日本列島の言語文化の多様性と豊かさを実感する。

■到達目標

・ことばを継承する意義について自分の考えを持つ。
・福島方言（日本語福島方言）を学習し、ことばの仕組みを理解する。
・沖縄方言（琉球語沖縄中南部方言）を学習し、ことばの仕組みを理解する。

■授業計画

【第１回】ガイダンス
【第２回】方言継承の意義を考える（１）東北方言
【第３回】方言継承の意義を考える（２）奄美方言
【第４回】福島方言 Lesson 1：アエウエオ、サススセソ（母音）◆
【第５回】福島方言 Lesson 2：オダガ゜エサマダガラ（子音）
【第６回】福島方言 Lesson 3：宿題忘っちぇ、怒らっちゃ。（音変化規則）◆
【第７回】福島方言 Lesson 4：俺、ばあちゃんさ、ままどおる買ってきた。（人称詞、格）
【第８回】福島方言 Lesson 5：昨日はいたったけど、今日はいたかな。（時制）◆
【第９回】福島方言 Lesson 6：雨やんだべ。どれ、行ぐべ。（モダリティ）
【第10回】沖縄方言 Lesson 1：アイウイウ（母音）◆
【第11回】沖縄方言 Lesson 2：「飲む」とヌムン、「高い」とタカサン（品詞）
【第12回】沖縄方言 Lesson 3：ヌマン、ヌダン、ヌムン、ヌムル、ヌマビーン（活用）◆
【第13回】沖縄方言 Lesson 4：ワンネー 東京ンカイ ウン（人称詞・格・とりたて）
【第14回】復習◆
【第15回】まとめ
◆の回に小テストをおこなう

英語や中国語などの外国語を学習するのと同じような形で、福島方言と沖縄方言を学習します。発音練習、単語の習得、文法事項の概説などをおこないます。授業回数が少ないので、流暢にしゃべれるようにはなりませんが、両方言の運用能力がちょっぴり身につくことを目指します。

英語や中国語にくらべて社会で実用する場面は限られますが、国内の多様なことばを学ぶことは、たいへん楽しく意義のあることだと思います。

■成績評価の方法

授業への取り組み姿勢20%、小テスト30%（５点×６回）、期末テスト50%

扱うことにした。

福島方言に加えて、沖縄本島中南部方言（以下、「沖縄方言」）も扱った。それは、日本列島のことばの多様性を知るために琉球のことばが重要であること、自身の母方言以外の方言も扱ってみたかったこと、本学には琉球文学のゼミがあって琉球語学習に対する一定の需要があることによる。ただし、沖縄方言については十分に詳しく扱わなかったため、本稿では福島方言に関する内容を中心に論を進める。

なお、それぞれの方言が標準日本語と同等の価値を持ち、言語として独立した体系を持つことを印象づけるため、授業内ではこの２つの方言を「福島語」「沖縄語」とも呼んだ。

4．2　実体計画

実体計画としては「福島方言」の具体的な中身を決めねばならない。同じ方言にも細かな地域差や個人差はあるが、この授業では筆者自身およびその家族が使うことばを基準にした。筆者と家族の使う方言は福島県旧保原町のことばであり、飯豊(1974)の記述する旧保原町方言とほとんど同じ特徴を持つ。授業では、細かな地域差や個人差もあり、どれが正しい福島方言というわけでもないが、飯豊（1974）を参考にしつつ、授業としては筆者と家族のことばを基準にすることを説明した。

ことばの実体として表記法を整備する必要もある。この授業では、白岩（2018）で示した表記法をもとに資料２のような五十音図を作って福島方言の音と表記を整理した。この表記は、日常的に使用しやすい漢字かなまじり式、形態音韻規則や活用の説明に必要なアルファベット式の２とおりの表記から成る。

伝統的な福島方言はいわゆるズーズー弁であり、標準日本語の「い／え」「し／す」「ち／つ」「じ／ず」にあたる音が区別なく発音される。アルファベット式ではこれらの音をｅ、su、cu、zuと区別なく表記することにした。一方、漢字かなまじり式では標準日本語に準じて書き分けることにした。これは、現在の福島方言話者にはほとんど標準日本語の識字能力があり、それに準じて書き分けたほ

資料２　福島方言50音図

ぱ pa	ば ba	だ da	ざ za	が ga	わ wa	ら ra	や ya	ま ma	は ha	な na	つぁ ca	た ta	さ sa	か ka	あ a
ぴ pi	び bi	ぢ zu	じ zu	ぎ gi		り ri.		み mi	ひ hi	に ni	ち cu		し su	き ki	い e
ぷ pu	ぶ bu	づ zu	ず zu	ぐ gu		る ru	ゆ yu	む mu	ふ hu	ぬ nu	つ cu		す su	く ku	う u
ぺ pe	べ be	で de	ぜ ze	げ ge		れ re		め me	へ he	ね ne	つぇ ce	て te	せ se	け ke	え e
ぽ po	ぼ bo	ど do	ぞ zo	ご go	ん N	ろ ro	よ yo	も mo	ほ ho	の no	つぉ co	と to	そ so	こ ko	お o

ぴゃ pya	びゃ bya	じゃ zya	ぎゃ gya	りゃ rya	みゃ mya	ひゃ hya	にゃ nya	ちゃ cya	しゃ sya	きゃ kya
ぴゅ pyu	びゅ byu	じゅ zyu	ぎゅ gyu	りゅ ryu	みゅ myu	ひゅ hyu	にゅ nyu	ちゅ cyu	しゅ syu	きゅ kyu
		じぇ zye					にぇ nye	ちぇ cye	しぇ sye	
ぴょ pyo	びょ byo	じょ zyo	ぎょ gyo	りょ ryo	みょ myo	ひょ hyo	にょ nyo	ちょ cyo	しょ syo	きょ kyo

●上段は標準日本語に準じた「漢字かなまじり」の表記、下段は福島語の音声を反映した「ローマ字」の表記です。

●二重線で囲った「い・え」「し・す」「ち・つ」「じ・ず・ぢ・づ」は、伝統的な福島語では区別なく発音されますが、「漢字かなまじり」で表記するときは標準日本語にあわせます。

(二重線で囲った音の例)
鯉（こい）koe／声（こえ）koe、梨（なし）nasu／茄子（なす）nasu、町（まち）macu／松（まつ）macu、火事（かじ）kazu／数（かず）kazu

●母音に挟まれると、ｋの音は［g］、ｇの音は鼻にかかる［ŋ］、ｔの音は有声音の［d］に変わりますが、この音変化は「漢字かなまじり」「ローマ字」のどちらの表記にも反映させません。　例）柿（かき）kaki—発音は［kagi］、鍵（かぎ）kagi—発音は［kaŋi］、旗（はた）hata—発音は［hada］

うが読み書きしやすいこと、また、戦後生まれの話者の多くは実際に発音し分けていることによる。

福島方言には母音間のｋ音、ｔ音、ｃ音が有声化するという特徴もある（ｃは［ts］などの破擦音を指す)。しかし、有声化の有無には揺れもあるため（筆者の観察や飯豊1974、幡2004の記述より）それを音声的な変異と見なし、漢字かなまじり式でもアルファベット式でも、有声化した音を濁音や有声子音ｇ、ｄ、ｚで表記することはしない。

4．3　普及計画

実体計画で決めたことをもとに福島方言の教科書を自作した。その一部として、主語・目的語の標示に関する箇所を抜粋して資料３、４に示す[4]。この教科書は白水社の語学教科書ニューエクスプレスシリーズやそれぞれ岐阜方言、大阪方言、沖縄方言の教科書である山田（2004)、岡本・氏原(2006)、西岡・仲原（2006）などを参考にしており、主に会話例、文法解説、練習問題から成る。解説は標準日本語で書き、福島方言の例文は上述の表記法で書いた。福島方言にふれたことのない学生でも、標準日本語の運用能力さえあれば、基本的なことから福島方言を習得できるように作成した。

授業はこの自作教科書をもとにおこなった。教授言語はなるべく福島方言を使うようにしたが、首都圏出身の受講生にあわせて、実際には語彙、文法面でかなり標準日本語に近い言語使用になった。

また、中学校の英語の授業のように、福島方言の語句を書いた画用紙を用意した。授業では、その画用紙を見せながら「リピート・アフター・ミー」の掛け声で授業者（筆者）の発声に続けて学生が一斉に復唱する反復練習をおこなった。

方言だけでなく生活文化全般が紹介できるよう、旧保原町の農村部や福島市街地の風景、郷土の家庭料理（いかにんじん、引き菜煎りなど)、養蚕農家（筆者の幼少時の自宅）などの写真も用意した。授業時には、写真をスクリーンに投影して筆者自身の生活経験を語った。語学学習の合間に生活文

資料３　福島方言教科書抜粋（会話例）

2　俺、じいちゃんさ花買ってきた。

●亮太は仏壇に手をあわせています。

亮太	：じいちゃん	死んでから		何年に		なるっけか。		
	zuucyaN	suNde=kara		naNneN=ni		naru=kke=ka.		
ばあちゃん	：震災の	前の		年だから		10年近くに		なんな。
	suNsae=no	mae=no		tosu=da=kara		zyuuneNcukaku=ni		naN=na.
亮太	：んだ。	俺	じいちゃんさ		花	買って	きた。	
	N=da.	ore	zuucyaN=sa		hana	katte	kita.	
	この	花びん	使って	いいかい？				
	kono	kabiN	cukatte	ee=kae.				
ばあちゃん	：ああ	使え。	水だら		台所さ		あっから。	
	aa	cukae.	mizu=dara		daedokoro=sa		ak=kara.	
	じいちゃんとこ		よく	拝めよ。				
	zuucyaN=toko		yoku	ogame=yo.				

♪ 音読のポイント

□で囲ったk, tの音を［g］, ［d］と発音すると、さらに福島語らしくなります。

資料４　福島方言教科書抜粋（文法解説・練習問題）

１．主語と目的語

標準日本語では、主語を「が」、目的語を「を」で示しますが、福島語では「が」「を」という格助詞をあまり使いません。「時計が壊れた。」「俺が座る。」のように主語だけがある自動詞文では、「が」がなくとも「時計」や「俺」が主語であることがわかります。

時計　壊っちゃ（壊れた）。　　俺　座る。

「俺が時計を壊した。」「俺が花を買ってきた。」のように主語と目的語がある他動詞文では、通常、人間や動物などの生物が主語、無生物が目的語です。生物か無生物かの違いで主語と目的語が区別されるので、「が」「を」は要りません。

俺　時計　壊した。　　俺　花　買ってきた。

生物が目的語になる場合は、目的語に「とこ」をつけて主語と区別します。「とこ」は「んとこ」「のとこ」ということもあります。また、若い福島語話者は「こと」「んこと」「のこと」ということもあります。

俺　じいちゃんとこ　拝む。　　知子　亮太｛んとこ／のこと｝　叩いた。

無生物が他動詞文の主語になることは基本的にありません。「風が戸を壊した。」のような文は「風で戸壊っちゃ（壊れた）。」と自動詞文に言い換えたほうが自然です。

なお、「を」は基本的にほとんど使いませんが、「が」を使うことはときどきあります。「が」を使う場合については、後の単元で説明します。

練習問題

１．次に示す標準日本語の文を、格助詞「が」「を」を使わない福島語の文に直しなさい。これまでに学習した音変化規則なども適用すること。

１）パソコンが壊れた。　　２）じいちゃんが軽トラを運転してきた。
３）風が吹くと、桶屋が儲かる。　　４）先生が亮太をほめた。
５）晃が亮太を殴ったから、知子が晃を止めた。

化に関する視聴覚資料が挟まるのはよい気分転換になったと感じる。

なお、沖縄方言については、首里方言を記述した国立国語研究所編（1975）の内容を基準とし、西岡・仲原（2006）も一部参考にして自作の資料を作成した。筆者に沖縄方言の会話例を作る力はないので、文法解説と練習問題だけを国立国語研究所編（1975）の記述をもとに作成した。結果として、語学学習というより言語学的な観点からの概説が多くなった。

５．受講生の反応

授業は前節で示した計画をもとにおこなった。本節では受講生の反応をまとめる。

まず、この授業をとおして受講生がどの程度方言を習得したか示す。この授業は木曜１限の開講科目で37名の履修登録があった。履修者は全員が本学文学部文学科日本語日本文学専攻コースの学生で、１年生が28名、２年生が５名、３年生が２名、４年生が２名であった。４名の学生が初回から、ないし最初の数回で授業に来なくなったが、残り33名は継続して出席し、期末テストを受験した。

期末テストの内容の一部を資料５に示す。期末テストは50点満点（配点は福島方言30点、沖縄方言20点）で、平均35.1点、中央値36点、最高点45点、最低点21点であった。このような問題を７割程度正解できる程度に習得が進んだことになる。

資料5　期末テスト抜粋

問2　次にアルファベット表記で示す福島語の語において、それぞれ［g］、［d］、［z］と発音されうるｋ、ｔ、ｃの音があれば、その音を、[k]、[t]、[c]のように字の周りを囲ってマークしなさい。　［１点×４］

(1) 戦う tatakau　(2) 光 hikari　(3) かつお kacuo　(4) ふたえまぶた hutaemabuta

問5　次の文では格助詞「に」「さ」のどちらが使われるか、授業で示した福島語の文法規則にしたがって、適切な助詞に○をつけて答えなさい。　［１点×２］

(1) 医者 {に／さ} 叱られる。　(2) 水くみ {に／さ} 来た。

問9　次の福島語の文を標準日本語に直しなさい。　［２点×５］

(1) だんだん寝（ね）っぺ。
(2) こねえだ、んめえりんごもらった。
(3) ゲームしったっけ、12時になってた。
(4) 今日は雨だけんちょも、練習すっつぉ。
(5) 休まねかったから、くたびっちゃべ。

問11　授業で示した「三母音の原則」をもとに、次の標準日本語の単語を沖縄語に直してカタカナで書きなさい。　［１点×３］

(1) 横　(2) 鬼　(3) 腰

問14　下記の活用表を参考に、次に示す沖縄語の文を標準日本語の文に直して漢字かなまじりで書きなさい。なお、文中の語は基本的に「三母音の原則」によって沖縄語から標準日本語に訳せる語である。

［(1) (2) は１点、(3) は２点］

(1) カジヌ　フチャン。　(2) アリガ　ジュース　ヌムン。
(3) ワンガ　ウヤンカイ　ティガミ　ウクタン。

標準日本語		沖縄語		
活用	終止	終止	否定	過去
カ行五段活用	書く	カチュン	カカン	カチャン
サ行五段活用	干す	フスン	フサン	フチャン
タ行五段活用	立つ	タチュン	タタン	タッチャン
マ行五段活用	読む	ユムン	ユマン	ユダン
ラ行五段活用	取る	トゥユン	トゥラン	トゥタン
ワ行五段活用	笑う	ワラユン	ワラワン	ワラタン
一段活用	起きる	ウキユン	ウキラン	ウキタン

次に学生の意見や感想を示す。授業では、次の３回にわたって学生の感想や意見を求めるアンケートをおこなった。

・アンケート①：方言の学習で難しいと感じる点について（第11回の授業時に実施、記名式）
・アンケート②：授業全体の感想（全学で統一的に実施する授業改善アンケート、第13回の授業時に実施、匿名式）
・アンケート③：この授業は自分にとって意義があったか（第14回の授業時に期末テストと同時に記名式で実施、記名式）

このうち②、③のアンケートで得られた全回答をそれぞれ資料６、７に示す。[5]

資料６　アンケート②（匿名式の全学的な授業改善アンケートの自由記述欄）の回答

【設問】この授業の良い点を具体的に記述してください

【回答】
・視覚資料を使って授業への興味や導入しやすさをあげていたように思った。
・実際に方言を口に出して読んでみるなど、学生の参加の多い点
・専門的な内容を生徒にも分かるように説明している点。
・良い意味で講義らしくなく、気楽に受けられた。朝早い１限からで眠かったが、頭の運動にもなる。
・レジェメの分かりやすさ
・映像とか見せてくれる。その土地の文化とかもわかる
・言語学の授業なので先生が練習問題などを出してくれる。
・小テストに授業で分かりづらかった所を学生に答えさせる問題を入れるなど先生の授業をもっと良くしようという考えが見えたところ。
・面白い

【設問】この授業を難しく感じた点、この授業の改善に向けた具体的な提案があれば記述してください

【回答】
・分かりにくい形式などをもう少し丁寧に解説して欲しい。
・唐突に放り込まれるちょっとした応用問題

資料７　アンケート③（記名式で期末テストにあわせてこの授業独自に実施）の回答

【設問】
この授業では福島語と沖縄語の学習を試みました。研究者の間では、国内の方言や少数言語を次の世代に継承することは社会的に意義があるといわれています。しかし、それは研究者の勘違いや傲慢かもしれません。よかったら、この授業を通じて、福島語や沖縄語の学習をしたことは、あなたにとって個人的に意義があったか、教えてください。もし意義があったとすれば、どのような意義があったか書いてください。もし意義がなかったとすれば、福島語や沖縄語の学習に費やした時間やエネルギーを、他のどんなことに費やせばよかったか書いてください。
あくまで個人の意見なので、どのようなことを書いても成績評価には反映しませんし、白紙でもかまいません。率直な感想を聞かせてください。（書いてもらった内容は、学会発表や論文執筆の際に引用する場合があります。支障がある場合は、そのむね付記してください。）

【回答】
●講義内容は十分に面白かったのですが、意義があったかと言われると、そんなになかったですね。やはり英語みたいに使えるという訳ではないので。ただ講議（ママ）は面白かったです。来年もまた白岩先生の講議（ママ）を受けたいです。
●日文科で方言学習に触れることができたのはとても貴重な時間でした。ありがとうございました。
●関東の近くである東北の方言を学ぶことで自分たちの今の言葉がどのように作られているかということが学べられ（ママ）、自分の発っ（ママ）している言葉により意識するようになったので言葉を重じる（ママ）ようになるという意議（ママ）はあったと思いました。
●意義があった。役立つとかはわからないが、単純に楽しかった。同じ日本なのに全然ちがう言葉のように感じるし、福島、沖縄だけでなく、もっと方（ママ）の方言も勉強したい。（関西の方とか九州の方とか）
●方言を学習したことは私にとって意義がありました。福島語や沖縄語は普段使うことがなく、新しい言語として学んだので、標準言語を見直すきっかけになりました。いつも使っている言葉が当たり前だと思っていましたが、方言でも使いやすいものや、文法的に伝えやすいものなど、方言の方が言葉として相手に伝わりやすいものもあるのだと感じました。方言を学ぶことによって視野が広がり、多様な文化を知ることができるので、これからの国際社会を生きていくための、多様性を認める力もつくと思いました。そういった意味で、意義があると思います。

●（テニスの王子様というマンガに登場する木手くん）私の好きな人が沖縄語を話すので、彼の話を理解しやすくなったり、彼がこういうときにはどう言うのか、という想像をしやすくなったりして役に立った。
●元々、世間一般で言う「役に立つもの」という評価基準に疑問を持っており、社会的な意義は特に意識していなかった。「役に立たない」ものこそが高級であろうから、世間一般の「役に立たない」を無視して、「役に立たない」ことに胸を張りたい、といったようなことを感じている。
●例えどれだけ勉強しても、エセ方言というものはイラつかれるものなのでしょうか？創作などに使用する場合も、どう思われているのか多少気にしてしまいます。
●この講義を通して、方言について学べたことで得たのは国内旅行をした際に現地の方々と交流するにあたって、話を盛り上げる事ができるスキルです。（現地以外の人が使う、知っているのは珍しいので）
●純粋におもしろくて、日本の知らない文化が学べて良かった。個人的興味を満たせたので満足
●地域によって少しずつ方言が違い法則もあること、それを残そうと努力している人達がいることに感銘をうけた。辺野古問題で気になっていた沖縄県知事のツイッターのことばなどが理解でき少し親近感が湧いた。
●方言で卒業論文を書く予定なので、とても参考になりました。
●日本人として、日本の方言を知ることは大切な事だと思った。なので、学ぶ意義は十分にあると思った。
●福島語、沖縄語をはじめとする国内の少数言語が標準日本語の土台となっていることが分かった。確かに方言はマイナーで学んでどう役立つのか分からない。けれども昔からの言語が今にもしっかり息づいていることを知り、また標準語との関わりを知り、方言がなければ今の日本の標準語はなかったのではないかと思った。
●先生が言っていた方言がなくなると日本語もなくなるのではないか、という所から自分が継承できるか分かりませんが意味はあったと思います。また福島語や琉球語（ウチナーグチ、ウチナーヤマトゥグチ）を使っている人と話せるかもしれない、そこから仲良くなれるかもしれないという可能性もあるので、私にとっても方言にとっても無駄なことはなく、意義のある時間だったと思います。（意味が伝わりづらかったらすみません）
●言語が統一化されていく中で、少数の人達の使う沖縄語や福島語は、継承するとして、何人のどれだけの人が、受け継げば残っていくのか等、考えると、社会的に意義があるかどうかは自分はわからなかった。だが、個人的には、外国語のような日本語を読み解く事はおもしろく、お笑い芸人の「千鳥」の２人のように沖縄語や福島語を武器に闘う人が現れれば継承も長く続いて行くのかなと考えた。
●言語を通じて文化などを学び、福島の人や沖縄の人への理解を深める事が出来たと思います。
●元々方言に興味はありましたが、福島や沖縄の言語について学ぶ機会はなかったので、楽しかったです。映像などの資料も見せて頂けるので、例があげられると、把握できる度合が違いますね。
●私自身、方言に物凄く興味があるので、すごく有意義な時間でしたし、方言は日本の良き文化ですから、決して意義のないものではないと思います。私の出身は奄美ですが、沖縄語とは全く違うので楽しいし、福島語はもっと新鮮で楽しかったです。方言研究は決して無駄ではありませんし、今後も幅広く継承されていくべきだと思います。

この授業は選択必修科目であり、もともと興味関心の高い学生が履修している。この手のアンケートで否定的なコメントは集まりにくいということもあるが、方言継承の社会的な意義はさておき、自分が方言学習をしたこと自体は楽しかったと評価するものが多かった。

実際に方言教育を実践するとき、重要なのは継承活動の社会的意義を理解してもらうことより、学習者の個人個人に「楽しかった」と思ってもらうことであるから、その点で一定の成果があったと考えたい。このような実践をしなくとも、一般論としての方言の価値は、首都圏の人たちにも理解されているだろう。しかし、それは理念的で抽象的な理解にすぎないかもしれない。実践を通じて自身が実際に方言を学び、その仕組みの一端を身につけるという具体的な経験に意義があったと考える。

6. 研究者としての反省点

この実践では、授業者として一定の手応えを得た一方で、研究者として反省すべき点も強く感じ

た。最後にそれをまとめて今後の課題とする。反省点は、端的にいうと「記述研究の蓄積が十分でない」ということである。

例えば、資料４に示した自作教科書の抜粋では、福島方言で格助詞「が」「を」の使用が非常に少ないことを解説している。しかし、白岩編（2017）所収の談話資料を見る限り、「を」の使用は極度にまれであるものの、「が」の使用は一定数見られる。談話資料の概観や筆者の内省の限りでは、下地（2019）のいう「脱主題化仮説」で一定の説明ができるように感じられるが、どのようなときに「が」が使われるか明確ではない。

これは「『が』は主格助詞である」とか「『が』は主語を表す」といった従来の説明で解決する問題ではない。主語・目的語の標示は、文法記述の面でも学習の面でも、かなり基本的な事項である。明確に説明できないのは問題だ。

筆者は自作教科書の文法解説（資料４）で

> なお、「を」は基本的にほとんど使いませんが、「が」を使うことはときどきあります。「が」を使う場合については、後の単元で説明します。

と書いてごまかしたが、「後の単元」を書くことはできなかった。「後の単元」を書くための記述研究は間違いなく研究者のなすべき仕事である。

もちろんこれは「が」の問題だけではない。実際に教材を試作して気づいたが、記述が足りないと感じる事項は言語体系の全般にわたる。方言に限らず、ひとにものを教えようとすることで、自らの理解が不十分であることに気づくことは多いだろう。筆者は「わがのわかってねえとこすっ飛ばしては、ひとさもの教えるどこでねえ（自分のわかっていないところを飛ばしては、他人にものを教えるどころではない）」と何度も考えた。

結局のところ、教育という実践的なことを進めるには、基礎研究としての十分な記述が不可欠である。一方、教育を試みることで記述の不十分な点を認識できるということを考えれば、実践が記述研究に資する点もある。基礎的な記述研究と実践的な方言教育は相互に連関することでより効果的に展開できるだろう。

以上、本稿では、本学で筆者がおこなった方言教育の実践事例を報告するとともに、実践のためにも記述研究の進展が不可欠であることを述べた。

付　記

本稿は下記の研究助成による成果の一部である。

- 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
- 日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）19H01255「日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究」
- 日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）19K00622「福島県相双方言の調査研究―方言研究は被災地にどのように貢献できるか―」
- 平成31年度立正大学人文科学研究所個人研究「継承活動にむけた方言記述研究の実践」

本稿は表１に示した実践方言研究会の第５回発表会（2019年10月26日、東北大学）での発表資料をもとに、主に２節の内容を加筆して執筆した。発表時に有益なご助言、励ましのおことばをくださったみなさまに感謝申し上げる。

実践方言研究会の発表では、発表資料を標準日本語と福島方言の２言語対訳版として作成し、口頭の説明では、他方言話者にもわかる程度に標準日本語を混ぜつつ、福島方言を使用した。発表時に方言使用を実践する点について参加者からも好評を得ることができたと感じている。このときの発表資料は実践方言研究会のサイトのほか、研究者データベースresearchmap（https://researchmap.jp/）の筆者の個人ページ内「講演・口頭発表等」の項目で公開している。

また、立正大学人文科学研究所令和２年第２回定例発表会（2020年10月28日、オンライン）でも発表の機会をいただいた。コメントをくださったみなさまに感謝申し上げる。

方言教育をおこなった授業科目「現代言語科学２」は隔年開講科目であり、本稿で報告した2018年度後期の実践に続き、本稿執筆中の2020年度後期にも授業実践をおこなっている。2020年度後期は全15回の

授業すべてを福島方言の学習にあてている。2020年度後期の授業で使用している最新版の福島方言の自作教科書を researchmap の筆者の個人ページ内「その他」の項目で公開している。

注

1）表１は実践方言研究会のサイト（https://www.ad.ipc.fukushima-u.ac.jp/~p002/jissen/index.html、2020年11月29日閲覧）、表２は日本方言研究会編（2017）による。

2）近年の言語研究では琉球列島のことばを日本語の方言でなく琉球語と呼ぶことが多いが、地域に固有のことばの継承を目指すという点で問題意識は共通するので、本稿では琉球語諸方言の事例も本土の日本語諸方言の事例と同様に扱う。

3）大学パンフレット「立正大学総合案内2018」によると、授業実践をした2018年度の５月１日時点で全学部の学生数10336名のうち、東京、埼玉、千葉、神奈川の１都３県出身者が7205名を占める。正確に確認したわけではないが、筆者の授業でも受講生の大多数は首都圏出身者であった。なお、大学全体としては埼玉県熊谷市にもキャンパスを持つが、筆者の所属する文学部は東京都品川区に所在する。

4）資料１に示したシラバスの執筆時点では「Lesson４：俺、ばあちゃんさ、ままどおる買ってきた。」として構想していた課である。教材作成の過程で題目を修正した。

5）氏名を明かさない形で回答内容を論文等で公開することは筆者の責任において授業内で説明した。

参考文献

飯豊毅一（1974）『言語使用の変遷（1）一福島県北部地域の面接調査一』国立国語研究所

大野眞男・小林隆編（2015）『方言を伝える　3.11東日本大震災被災地における取り組み』ひつじ書房

岡本牧子・氏原庸子（2006）『新訂版　聞いておぼえる関西（大阪）弁入門』ひつじ書房

国立国語研究所編（1975）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

佐藤美野里（2019）「国語科において方言を扱うこと一言語文化学習材としての可能性と方向性一」『信大国語教育』29、信州大学国語教育学会、pp.56－68

下地理則（2019）「現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』くろしお出版、pp.1－36

白岩広行編（2017）『福島県伊達市方言談話資料　一震災後の生活と語り一』上越教育大学大学院学校教育研究科白岩研究室（科研報告書）

白岩広行（2018）「福島方言の表記法を考える」『立正大学国語国文』56、pp.1－13

東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救う　3.11被災地からの提言』ひつじ書房

中川奈津子・山田真寛（2018）「竹富島『星砂の話』の絵本制作と一般読者向け文法概要の執筆」『国立国語研究所論集』14、pp.145－167

西岡敏・仲原穣（2006）『沖縄語の入門（CD 付改訂版）一たのしいウチナーグチ一』白水社

日本方言研究会編（2017）『日本方言研究会第104回研究発表会発表原稿集』日本方言研究会

幡早夏（2004）「福島市方言における無声子音の有声化」『日本方言研究会第79回研究発表会発表原稿集』、pp.１－８

山田敏弘（2004）『みんなで使おっけ！　岐阜のことば』まつお出版

山田真寛（2017）『地域言語学習コンテンツ制作・利用プロジェクトを核とした琉球諸語の復興研究』（公益財団法人博報児童教育振興会2016年度第11回児童教育実践についての研究助成研究成果報告書）

横山晶子（2019）「奄美沖永良部島における言語再活性化の取り組み」『島嶼研究』20(1)、pp.71－83

横山晶子・籠宮隆之（2019）「言語実験に基づく言語衰退の実態の解明　一琉球沖永良部島を事例に一」『方言の研究』５、日本方言研究会、pp.357－376

横山晶子・冨岡裕（2019）「琉球沖永良部語の衰退要因に関する一考察」『第158回日本言語学会大会予稿集』、pp.72－78

（2020年12月30日受理，2021年１月５日採択）